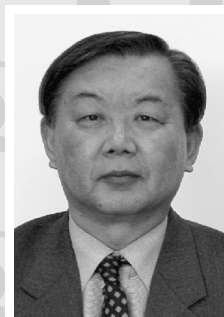


# NPO ネットワーク

## シニアネット活用から見た NPO、コミュニティビジネス の可能性



古賀 直樹

私は、日本のシニアネットの草創期にNPO法人シニアネット久留米<sup>1</sup>(以下SNK表す)を立ち上げ、5年間理事長、事務局長として運営にあたって来ました。この間、日本人としては初のNPO法人シニアネット<sup>2</sup>(米国)理事も経験しました。(2000～2004年)日米両国のシニアネットに係わり、日米のNPO運営の違いを学ぶことが出来ました。また、コミュニティビジネス(以下CBと表す)に関しても、もっとも早い時期から係わり、CB普及のために全国各地に出向き講演・支援等もさせて頂き、地域で活動しておられるCB実践者の人たちと直接知り合うことが出来ました。私自身も九州においてCB支援のための情報サイト「九州コミュニティビジネス情報交流プラザ<sup>3</sup>」を立ち上げ運営にあっています。こうした活動を8年近く続けて行く中で、いまNPO、CBが直面している課題、そしてこれからの可能性などに少し触れてさせて頂きます。

### 1. 日米のシニアネットを通して学んだ事

1997年に福岡県久留米市のインターネット協議会<sup>4</sup>の中で「シニアネット研究会」をつくり、その後民間の非営利団体シニアネット久留米が生まれました。ITを活用してのシニアの仲間づくり生き甲斐づくりの自己啓発型のボランティア団体です。シニアネットを立ち上げようと思った理由は2つです。1つは、リタイア後うまく地域に溶け込めないでいるシニアがネットを通して地域にソフトランディングしやすくする。2つ目は、シニアが培ってきた経験を地域に活用できる仕組み

を作る。こうした目算のもと、活動を開始しましたら、あっという間に500名近いシニアが参加されました。参加される人たちの思いは千差万別ですが、当時を振り返ってみるとITブームの中で、情報弱者にならないためにパソコン操作を覚えたいとの希望が強かったようです。SNKも2000年にはNPO法人を取得し、シニアのITサポートセンターとして、いまでも地域で有用な役割を果たしています。国のIT推進事業の一環に久留米市からシニア向けのIT講習会の委託事業を受け、当時1年間に2000名近いシニアにパソコンの手ほどきの講習を行いました。78歳のシニアが80歳のシニアにパソコンを教える姿はなんともほほえましいものがありました。

シニアネットの特徴はシニアがシニアにパソコンを教える事です。キーボード操作もままならないシニアに若い世代が専門用語を早口で言うものなら、ますますシニアはおじけづいてしまいます。その点同世代が時間をかけながら対応すれば恐怖心も軽減され、その分一般のシニアにSNKが評



久留米市ボランティアグループのパソコン教室

判になりました。こうしてシニアネットの活動の輪が広がりだしてきました。

そこで、せっかくIT技術を習得したシニアが地域にたくさんおられるのだから何か地域貢献のできる事業はないものかと考え、郷土の歴史文化をデジタル化して子ども達の世代に将来活用してもらおうと『草の根デジタルアーカイブ』事業を手掛ける事にしました。たまたまふるさと財団の2002年度「e-ふるさとパイロットプロジェクト」に全国で6団体の中に採択して頂き、筑後地方33市町村の歴史文化の資料や情報のデジタル化を始めました。今では、この中からこだわりツアーリズム「ふるさと探検<sup>®</sup>」として、郷土の新しい観光事業へと発展してきております。

私はこの活動を通して、この間に、いろいろな事を学ぶことが出来ました。

まず、シニアには素晴らしいコンテンツ（経験、智慧）を持った人たちがたくさんおられる。シニアは責任感が強くて、納得できるものであれば自分の時間を惜しみなく提供して活動される。それから次の事は、本音のこととしてシニアの一面を知る事が出来ました。それはシニアが収入ゼロだと5万円しか使わない人が5万円の収入を得たら10万円を使う。どちらも差し引きマイナス5万円だが、地域に与える経済効果は2倍近いものになる。こうしたこともシニアネットを通してシニアと触れ合った結果だと思えます。

SNKが日本ではシニアネットの走りの役割だったこともあり、私の講演やSNKの活動をホームページや新聞などで見られた人たちが全国各地にシニアネットを立ち上げられ、いま現在100団体以上が地域で活動しています。ただ、残念なことは、日本のシニアネットが米国のシニアネットのように全体をネットワーク化した大きな組織にならないで、タコツボ型のローカルネットに終始している点です。米国のシニアネットは全米中に300近い自主独立のラーニングセンター（日本各地のシニアネットのようなもの）が本部とつながり全体で4万人近い会員組織として活動しています。

また、シニアネット本部が提供しているホームページサイトには年間100万人以上の人のアクセスがあり、そのことがますます企業や財団などからの資金援助も受けやすくしています。また企業とパートナーシップを結びいろいろな事業を手掛

けています。日本では個々のシニアネットが500名以下の小さな会員組織のために企業から見たらその分魅力にかける事になります。

私が、米国シニアネットの理事として、米国のシニアネットの活動を見て一番感心したのは、300のラーニングセンターがお互いに情報共有している点です。“一人は皆のため、皆は一人のため”と言いますが、299の成功失敗事例を得ることが出来る組織づくりが米国シニアネットの強さではないかと思えます。

こうした視点で日本のNPO、CB事業を見ると、それぞれの活動は素晴らしいものがあり、中心で活動されている人たちの努力には、頭が下がる思いもありますが、規模が余りにも小さいために、事業を遂行するための「ヒト、モノ、カネ」の三要素に大きな弱点があり、継続して事業を続けていくためのパワーになり得ていないのが残念です。そこで、いま、これらの問題を解決するためにシニアネットジャパン<sup>®</sup>を創設して全国各地のシニアネットのネットワーク化を図る事を目指しています。

## 2. 米国シニアネットから学んだNPO法人の日米での運営の違い

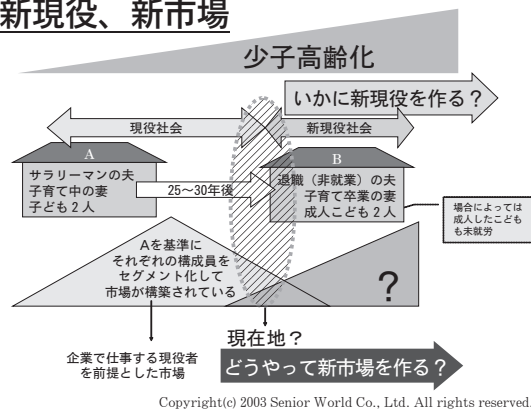
初めてNPO法人米国シニアネットの理事会に参加するためにサンフランシスコに出かけ、2日がかりの理事会に出席しました。理事会は年4回開催され、1日目は全米中から集まる理事（全員で10名）との情報交換、交流ための食事会などが行われ、2日目に朝8：00から夕方まで集中的に案件の会議をします。理事会の主な役割は、本部運営のチェックと資金調達、ブランド力アップのための広報や次年度以降の戦略作りです。まず、ここで一番先に私なりに学んだ事は、理事会、事務局、ボランティアメンバーの役割の明確化です。NPOと言え一つの事業体です。そのためには「ヒト、モノ、カネ」がうまく生かされることが重要です。日本では、NPO法が施行されて日が浅いからかもしれませんが、米国のNPO活動を見ていると、大人と子どもの違いを感じました。日本のNPO活動の問題点として、ボランティア団体的意識が強すぎる。行政頼りになりすぎている。組織での役割が未分化しているために、特定

の人たちに負荷がかかり過ぎている。それでいて会員・理事の人達がすぐに平等意識を出しすぎるために、やる気を持った人たちの足を引っ張る事になってしまいがちである、などが挙げられます。私も理事長、事務局長などを5年近くやってみて、最後は疲労感以外何も残らなかったと言う、満たさされない思いが積もりました。私が知りえているNPOを引っ張っている人達が4~5年で相当疲弊して第一線を離れている姿を見ていると、日本のNPO活動に一抹の不安を感じます。この点での改善策としては、NPOと言え資金調達力の強化を図るための規模の拡大が必要だと思います。米国では、今でもよく行われているNPO同士の合併、提携などで、とにかく分母を大きくして「ヒト、モノ、カネ」がうまく回る仕組みにする事例などを視野に入れるべきかも知れません。そんな事を米国シニアネットの理事会に出席して感じました。

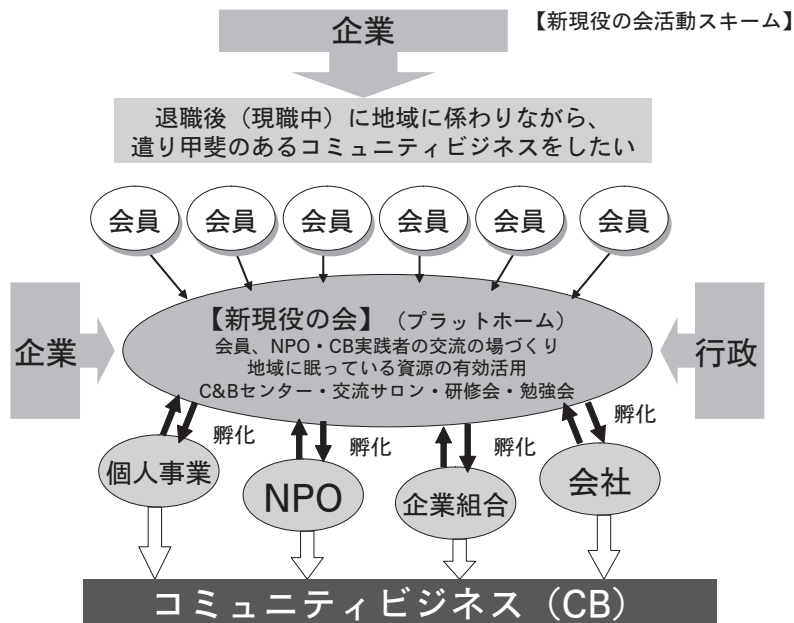
### 3. シニアから団塊へ

シニアネットを通して日本のNPO、CBに草創期からか係わった関係で、全国で先駆的に活動されている人たちとたくさん知り合うことが出来ました。NPO、CB活動に取り組んでおられる人

## 新現役、新市場



たちは、使命感に燃え頑張っておられますが、思っただけが先行して逆に私生活の面で窮地に陥っておられる人たちも、また、たくさん見てきました。いかにして、NPOやCBを事業として成り立たせることができるか。どんなにいい事でも継続的活動としてやって行くことが出来なければ皆からの支持を得る事は出来ません。こうしたことを考えているうちに、これから大量にリタイアする団塊世代を地域のNPO、CBのあらたな担い手として活用できないかと考えるようになりました。1946~50年生まれを団塊世代とすると1000万人とも言われています。この世代が2007年から地域に戻ってきます。この団塊世代が第2の人生の仕事として参画してくれれば、大きな力になる。そこで、



この団塊世代が地域にうまく参画できるようにするために、シニアネットの青年部のネットワークを作ろうと思い「新現役の会」をいま立ち上げ広める活動を始めました。そうした意味ではシニアネットの第2ステージが、いま、始まりだしてきたのかもしれない。

#### 4. 最後に

日本のNPO、CBがこれから地域でより大きなパワーを得るためには、上記の団塊世代の取り組みが何より重要だと思っています。団塊世代が持っている現役社会で培ってきた経験、人脈・情報の活用とそして何よもこれから自分たちも地域に戻り、地域の中で遣り甲斐もてる何かをやりたいと言う思いを持っている点です。いま“企業・組織の仕事”と“地域のしごと”の間の隔たりが大きいためこの間を埋める活動がどうしても必要です。それが「新現役の会」活動です。

「新現役の会」では、各地で「駅前地域ビジネス塾」開設にむけて自主的に取り組みだしています。この塾では下記のようなことをテーマにしています。

- ・ 同じ思いを持った仲間が集まろう
- ・ 自分達のこれからのこと、“終の棲家”になるであろう地域のことを考えてみよう
- ・ 自分達で地域経営の視点にたって、いま地域でやられている地域サービス事業の洗い出しをしてみよう
- ・ 足りない人材を集めてみよう
- ・ すでに地域で活動しているNPOやCB関係者と話してみよう
- ・ 市長や行政、地元企業、商工会、農協などの関係者の話を聞いてみよう
- ・ 地域をくまなく歩いて、自分達で地域を体感してみよう

次に、上記のヒヤリングが出来たら、地域で自分達が出来“地域のしごと”のプラン作りを始め、“地域のしごと”を事業化して行くというものです。ここにすでに地域で活動されているNPO、CB団体とジョイントが出来る事を期待したいものです。

- i NPO法人シニアネット久留米  
<http://www.snk.or.jp/>
- ii NPO法人シニアネット（米国）  
<http://www.seniornet.org/>  
1986年に創設され、サンフランシスコに本拠地を置き、約300ヶ所のラーニングセンターを有する組織。IT（情報技術）を活用してシニアの活性化を図るその活動は、各所で高く評価され、会員4万人。また、講習を支えるボランティアの数も4000人近くを有した
- iii 九州コミュニティビジネス情報交流プラザ  
<http://www.sw-cbway.com/>
- iv 久留米・鳥栖地域インターネット協議会  
<http://www.ktarn.or.jp/jnl/jnl9901/dai8.htm>  
久留米・鳥栖テクノポリス圏域におけるコンピュータネットワーク技術の向上普及、インターネットを活用した地域ネットワークの運用による地域情報化への取り組み、技術研究、研修、講習会、情報交換会、併せて会員の相互交流会等を行う産官学組織。
- v 草の根デジタルアーカイブ  
<http://snkcda.cool.ne.jp/>  
「筑後デジタルアーカイブ」は地域に存在する貴重な歴史遺産や郷土資料、文化財などをデジタル化して後世に継承していく事業。筑後川・矢部川流域歴史探訪、神社仏閣、文化遺産、際、伝統芸能、筑後三十三ヶ所観音霊場などの取材とデジタル化、また世の中から忘れ去られた本や、図書館や家庭で眠っている貴重な本をデジタル化し「電子図書館」としてインターネットで読めるように公開。
- vi ふるさと探検  
<http://snk.cool.ne.jp/tanken/index.html>
- vii シニアネットジャパン  
<http://www.senior-net.jp/>  
(SeniorNetと日本で唯一の正式提携団体)
- viii <新現役の会> <http://n-geneki.com/>  
●新現役宣言&プロフィール  
<http://n-geneki.com/sengen.htm>

#### プロフィール……………

古賀 直樹（こが なおき）  
1948年生まれ。福岡県出身  
（株）シニアワールド代表取締役社長  
民間非営利団体シニアネットジャパン代表  
（SeniorNet(R)と日本で唯一の正式提携団体）  
NPO法人SeniorNet（米国）元理事（2001～04年）